

# 学部卒業論文の管理・保管体制の現状と課題

——愛知大学地理学専攻を中心に——

近藤 暁夫

## 第一章 問題の所在

多くの学部のカリキュラムでは、卒業論文（以下、引用文を除き「卒論」と略記）が、その集大成として、学の根幹に据えられている。また、卒論の作成は、学部生の大学生活においても、自らの学業の最大の成果であり、学生生活を締めくくる記念碑的存在として価値づけられる。筆者の奉職する愛知大学の文学部も、「学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）」の中で「卒業論文」は必修で、自分でテーマを決め、資料・実地調査を行い、これに基づいた解釈、先行文献との比較を通して、自分なりの結論を導き出し・・・口述試験を行うことで、テーマ発掘力、調査力、資料の解釈・分析力、ものごとを自分なりに考え、新たなものを創造し、表現する力、また自分で導き出したものや創造したものを人前で発表する力、質問や批判に答え、他者と対話する力が養われたか

どうかを確認します」と、卒論を作成させることが、学部の教学の根幹であり、学士認定の根拠であると、広く社会に対して宣言している。また、卒論も、「ささやかながら研究」<sup>①</sup>である以上、それはただ書かれて終わりのものではなく、学術的な成果として広く社会に受け継がれ、未来に活用される対象になってこそ意味のあるものだろう。卒論の存在と蓄積は、その大学や学部の教育実績を示す何よりの財産でもある。

このことから、卒論は、常に社会の検証に耐えられる状況、つまり常時完全公開がされるかとはかく、適切な問い合わせがあった場合に閲覧に耐え、それを作成させた学部や教員の教学が一定の水準に達していることを証明する証拠として、あるいは純粹な学術的成果として活用できる状態にある必要がある。卒論が学部教育の集大成であるのなら、その大学・学部の卒論を一読させることが、その教学の質を最も雄弁に伝える方法とならずである。しかし、もしその質を示す確たる証拠が紛失したり、散逸したり、死蔵され誰の目にも触れられないのなら、それは大学が社会的責任を果たしていないだけでなく、証拠を示さないまま教学の質を「学位授与方針」等で誇るといふ詐欺的行為とすら捉えられかねない。

しかし、同時に卒論は、著作権においては著者たる学部生に権利があり、また学部の単位認定に用いられるために作成された文書、即ち内部資料であることから、必ずしも万人に公開され、自由に複写される対象として好適ともいえない。卒論の保管と公開に関係した著作権や個人情報保護をめぐる法的な議論は、平井に詳しいので繰り返さないが、この点において卒論の管理や公開における扱いは、より学術成果としての社会的な性格が強い博士論文や修士論文と異なるものとして考えるべきだろう。

このように、卒論は、学術成果であり大学や学部にとって自らの教学の質を証拠立てる財産という公的性格と

同時に、その管理や公開にはその特別の配慮が必要という両側面を持つ。このため、卒論の管理体制をどう構築するかは、教育機関としての大学の大きな責任として、議論の対象になるべきだろう。

しかしながら、日本の大学において、卒業論文の管理体制や保管状況を具体的に基づいて検討したものは、管見の限り平井のみである。平井にしても、議論の対象は国立大学に限定される。また議論も大学単位の検討で、学部や専攻、あるいは専攻内部のような卒論管理の現場の状況に十分触れられているとはいえない。また、卒論の収蔵冊数など、数量的な実態把握の上で議論が組み立てられているわけではない。そこで本稿では、筆者が専門とする地理学関係の専攻に限定された話ではあるが、卒論を管理する現場である専攻や専攻内部での卒論管理体制と卒論の状態を詳細に検討し、そこから今日の大学現場における卒業論文管理体制の現状と問題点を考えたい。

## 第二章 卒業論文の管理体制の現状

大学が卒論を保管する場合、その体制としては、主に①図書館や文書館で一元的に管理・保管する、②専攻や教室単位で管理し専攻室等に保管する、③各教員が管理し個人研究室等に保管する、の三形態が考えられる。いずれの形態も一長一短あり、どれが一番すぐれているかは容易に判定できない。

①は厳密な管理を可能とし長期間の保管に耐えるという点では万全かつ効率的である。しかし、この形態では卒論が図書館の奥、多くは書庫の閉架書架に置かれることで、卒論を一番利用するニーズが高いであろう後輩の

学部生の目に触れにくくなり、活用されにくくなるリスクをとまなう。また、すべての卒論が収蔵されている巨大なアーカイブの中で、目当ての卒論を検索し閲覧することも難しい。研究成果は社会に発信され活用されてこそ意味のあるもののだが、実質的に卒論が死蔵状態になると、大学の財産たるべき卒論が有効に活用しきれなくなる恐れがある。

また、毎年新たな卒論が収蔵されるため、学生数に対して図書館等の設備の規模が大きい旧帝大クラスの大学でもなければ、いずれ収蔵スペースが満杯になるおそれがある。毎年蓄積される膨大な量の卒論を管理し、検索や閲覧に耐えられるシステムを構築・維持するのに図書館に相当の労力を迫る点も欠点といえる。<sup>5)</sup> 本学を例に取れば、本学は2014年現在13万人を超える卒業生を輩出しているが、卒業生すべてが卒論を提出し、<sup>6)</sup> それすべて図書館に収蔵されているとすると、本学の三キャンパスの図書館の蔵書数(約150万)の一割近くを卒論が占めることになってしまう。たとえ卒論が大学の教学成果を示す貴重な財産であったとしても、他の蔵書を受け入れるために、いずれ廃棄を検討することになるだろう。実際、多くの大学において、卒論の保管年数は5年に設定されており、それを超過した卒論は廃棄されている例も少なくない。<sup>7)</sup>

②の形態は、専攻の学生が閲覧できる状態に卒論が保管されることから、図書館等に収蔵するよりも教学や学術的貢献に卒論が活用される可能性が高まる。また、卒論提出者と同一学問分野の人間や組織が卒論の管理をするため、より現場の事情に沿った柔軟かつ効果的な管理体制が構築可能である。卒業生に対しても、自身の出身教室に自分の卒論が管理され、いつでも見に行けることで、専攻への愛着を持ち続けられる効果が期待できよう。筆者の経験をもとにした主観だが、専攻が専攻室等の設備を持つ場合は、この形態で卒論が保管されることが多

いようであり、筆者が訪れた地理学教室の多くにも過去の卒論が保管されていた。例えば、本学文学部の卒論管理体制も、基本的に専攻単位になっており、他大学では東京大学人文地理学教室などが教室内で卒論を博論、修論と合わせて保管している。ただし、本学も東大も原則として卒論の一般への公開はしていない。<sup>⑧</sup>

しかしながら、この体制も、いずれ卒論の在庫増加に収蔵スペースが限界を迎えるリスクがある点は変わらな<sup>⑨</sup>い。例えば、お茶の水女子大学地理学教室は、卒論を長年教室内に保管してきたものの、在庫の増加に耐えきれず、卒業生に返却する手続きを取った。<sup>⑨</sup>

また、管理が教室に任せられることにより、図書館等で一元管理するのに比べて卒論が紛失するリスクも高まる。例えば、地理学教室として日本で最も長い歴史を持つ京都大学の地理学教室では、卒論の年次別一覧が1910年の卒業生分から公刊されており、後に日本を代表する碩学となった卒業生たちによる綺羅星のごとく並ぶ卒論タイトルを閲覧するだけでも、日本の地理学の学史をなぞるときに壮観さを覚える。<sup>⑩</sup>しかしながら、1944年から1948年の卒論は、多くが所在どころかタイトルすら不明になっているものも少なくない。戦中戦後の混乱を極めた時期であり、やむを得ない部分はあるが、小牧実繁教授の下、日本地政学の総本山となった戦時下の京都大学地理学教室での卒論指導や学生の関心の実態、あるいは敗戦により小牧らスタッフのほとんどが大学を去り、東洋史専攻の宮崎市定が兼任教授として再建にあたった体制下での学生の動向や卒論指導の実態を示す最大の物的資料が失われていることは、地理学史上の損失といえる。それを抜きにしても、海野一隆、岩田慶治、水津一朗、井関弘太郎ら、戦後の地理学会を担った碩学たちの出発点といえる卒論が公式にはタイトルすら不明なのは、後進の一地理学徒として残念と言っはかない。<sup>⑪</sup>

保管スペースの問題は、学生数が多い私立大学でより深刻である。例えば、日本有数の大規模地理学専攻である立命館大学地理学専攻では、五千人を数える卒業生がいる。仮に、この卒論をすべて地理学専攻で保管するとすると、卒論保管専用の部屋が必要となる。もちろんそれは不可能であり、当該専攻では毎年の卒論の中から特に選抜したものを二本程度残して専攻の共同研究室等に保管し、それ以外の卒論は提出者に返却する方式を取っている。<sup>(1)</sup> 卒論を教学の質の証明文書とし、後輩が卒論を作成する上での見本や目標として活用するならば、特に出来る良い卒論のみを残す方法で確かに十分だといえる。しかし、教学の質の証明とする場合は、(常時閲覧可能な状態にするか)ともかく) 出来の悪いものも同時に保管して開示可能な状態にすることも、また第三者の検証に耐える上で必要だろう。選抜した卒論のみを保管する場合は、それが仮に紛失した場合に当該年度の卒論すべてが教室にない状態に陥るため、紛失によるリスクも大きい。いずれにせよ、本来はすべての卒論が保管できるに越したことはない。

③の形態は、収蔵場所が各教員の研究室に分散することによって、結果的に大学全体で見れば最も収蔵スペースを確保できる。また、卒論を指導した教員が直接卒論を手元で管理し、後輩学生の指導に生かすのだから、論理上は最も現場の実態に即した厳密かつ効果的な卒論の管理運営が可能になる。しかしながら、普段研究室に立ち入らない学生や外部の人間が卒論に触れられる機会は極めて限られ、卒論が死蔵状態になる可能性も高い。また、第三者のチェックも行き届かず、卒論の管理や活用が教員個人の力量と方針によって左右されるため、紛失や廃棄のリスクも伴う。このような管理形態をとっている場合は、教員が退職するときに一緒に卒論が廃棄される例も少なくない。

### 第三章 愛知大学文学部地理学専攻の卒業論文管理体制とその問題点

#### (一) 卒業論文管理体制の変遷

愛知大学文学部地理学専攻（以下、「本専攻」と略記）では、前章で示した三形態のうち、卒論を専攻単位で保管する②の形態をとっている。特に、2012年度からは、専攻の共同研究室が確保されたことから、そこで卒論を保管し、専攻の学生が閲覧できるようにしている<sup>15</sup>。また、共同研究室への入室はパスワード制となっており、平常時に専攻関係者以外が卒論を閲覧することは不可能であるが、近年の卒論タイトルは専攻ホームページで公開してあり<sup>16</sup>、外部からの問い合わせ自体には対応可能である。なお、2012年度以前には、別の専攻室に卒論を保管していたが、これも学生が閲覧可能な状態にしていた。

現在、本専攻では初代教授の千葉徳爾時代の1969年の卒論から、2012年度の卒業生のもので、創設以来半世紀にわたる卒論約600本（文学会室収蔵分を含む）を収蔵している。また、これらの卒論の蓄積を学部生の教学において積極的に閲覧させるとともに、卒論を手本とした追跡調査を学生に課す科目を設けることで、専攻のカリキュラムに生かしている。卒論を生かしたカリキュラムは、専攻の教学の特長のひとつとして、外部への発信も行っている<sup>17</sup>。

本専攻が永年にわたって卒業生の卒論を保管し、教学に活用することができたのは、専用の部屋（現在は共同研究室）を持ち、卒論の保管が可能であったことが大きい。また、私学としては比較的小規模な地理学教室であ

り、毎年の卒論の蓄積量が収蔵スペースを超過することがなかったことも、卒論を廃棄や卒業生への返却に踏み切らざるをえないような状況にすることがなかった要因だといえる。

## (二) 所在不明論文の問題

前節で述べたように、本専攻では、原則すべての卒論を専攻で保管し、活用を図っている。本学においても、本専攻のように長期にわたって専用の研究室や資料室を確保してきた専攻が少ない点、カリキュラム上積極的に卒論の蓄積を活用している例が少ない点からみて、本専攻の卒論の管理状態は本学内ではかなりの程度良好であると考ええる。しかし、専攻室等に卒論を保管する体制の抱える欠点として前章で指摘した、管理が行き届かないリスクは、本専攻においてもぬぐえない。ここでは、本専攻の卒論管理体制の実態を、学生が提出し共同研究室に保管してあるはずの卒論が、実際には所在不明になってしまっている状況の検討を通して考えたい。

先述のように、本専攻の共同研究室と文学会室には、専攻の初年度卒業生(1969年)の卒論から、現在に至る、約600本の卒業論文が製本された状態で保管されている。しかし、この600本が、専攻に提出されたすべての卒論を網羅したものとは限らない。提出された卒論のどの程度が共同研究室に収蔵されており、どれが所在不明になっているかは、過年度の卒論提出名簿と論題一覧を、収蔵されている卒論の本体と対照させながら確認していく必要がある。しかしながら、現在本学の教務課で確認できる本専攻の卒論論題一覧は2001年度以降のものに限られるため、ひとまず2001年度から2012年度までの卒論224本を対象を絞り、どの程度の卒論が共同研究室に収蔵されているかを検討した。その結果を第1表に示す。



第1表 愛知大学文学部地理学専攻共同研究室の年次別卒論取蔵状況

提出年度	提出卒論総数	所在確認	所在未確認	所在不明率
2001	21本	18本	3本	14%
2002	17本	11本	6本	35%
2003	17本	12本	5本	29%
2004	13本	9本	4本	31%
2005	20本	17本	3本	15%
2006	13本	10本	3本	23%
2007	13本	12本	1本	8%
2008	24本	24本	0本	0%
2009	23本	21本	2本	9%
2010	25本	21本	4本	16%
2011	20本	18本	2本	10%
2012	18本	16本	2本	11%
合計	224本	189本	35本	16%

・提出卒論総数は愛知大学豊橋教務課資料に、卒論所在確認状況は筆者の調査による。

2001年度から2012年度の間、卒論が専攻(学部)に提出され、学位認定がなされた学生(卒業生)は延べ224名である。よって、共同研究室等に収蔵されているこの間の卒論は224本なければならない。しかしながら、実際に共同研究室で収蔵が確認できたものは189本に留まり、差引分の35本の卒論が所在不明の状態になっている。

年度別では、提出年次が古い卒論が比較的所在不明の比率が高く、年次によっては提出された卒論の三分の一以上が所在不明になっている。特に、2002年度から2004年度の卒論において所在不明が目立つ。一般に、年数を経るほど文書の紛失や破損の危険性は高まることから、古い年次の卒論がより多く所在不明になっていることは一定合点いく。しかし、2007年度から2009年度の所在不明の卒論は全体の1割を切るのに対し、2010年度から2012年度ではいずれも1割以上になっているなど、必ずしも古い年次ほど卒論がより多く所在不明になっているわけではない。いずれにせよ、全体の16%に及ぶ卒論が所在不明になってしまっていることは、先述した卒論をもって教学の質を証明するという役割の毀損、専攻に蓄積された財産の損失、専攻としての文書管理体制の不備、卒業生との信頼関係の構築が損なわれかねない点、いずれにおいても深刻な問題である。

### (三) 所在不明卒業論文の特徴

前節において、本専攻の卒論の一定数が所在不明状態になっていることを確認した。それでは、そもそも卒論がなぜ所在不明になるのだろうか。いかに専攻の財産とはいえ、第三者が卒論自体を転売して得られる金銭的利益

益はほとんどないことから、外部の人間による窃盗の可能性はほぼ考えられない。卒論が所在不明になる要因として考えられるのは、次の三点であろう。①卒論を提出した本人が持ち帰った。②後輩が自分の卒論の参考用に持ち帰り返却していない。③専攻の管理体制が不十分で、卒論の整理整頓や部屋の清掃をしている間に紛失してしまった。以下、それぞれについて検討したい。

①は、筆者も「(自分の卒論は)とても恥ずかしくて後輩に見せられるものではない」旨の学生や元学生の声を、本学本専攻に限らず各所で聞いており、自分の卒論を他人の目に触れないような状態にしたいと考えている人間は一定数いることから、実際にあるものと考えている。しかし、大学に一旦提出した卒論は、大学の法人文書としての性格を帯びるため、法的にその所有権は大学にある。<sup>(18)</sup>たとえ提出者であっても、大学から返却されない限り、その所有権を回復することはできない。それが嫌なら卒論を提出せず単位認定を求めなければいけない話である。ただし、卒論の返却や自身の卒業後の卒論管理に対して何らかの自身の希望に関する意思表示をすることは可能であろう。

しかしながら、卒論の著作権はその著者である学生(卒論提出者)本人に帰する。<sup>(19)</sup>現実問題、著作権者が持ち帰ったことに対して、専攻や大学が咎め立てることや、返還訴訟を起こすことは、卒業生や学生との信頼関係を鑑みても困難である。大学側にできることは、卒論がなくなつてからあわてることよりも、一旦提出された卒論の所有権はあくまでも大学に帰することをすべての学生に周知させること、また、管理に責任をもち、卒論の取り扱いや公開のルールを明示して、無断で卒論を持ち帰らせないよう自覚を促すこと、そして何よりも、彼らが自身の誇りとしていつまでも研究室に置いて後輩に見てもらいたくなるような卒論を提出させるように親身に指

導することであろう。

次に、②は、学生を疑うことになるため、考えたくないことだが、教員（筆者）が貸した本すら返却しないでそのまま卒業や退学していった学生が現実に一定数存在していることからみて、ありえない話ではない。実際、筆者が以前かかわった大学の専攻では、当時院生であった人物が学部時代に提出した卒論が共同研究室に製本の上収蔵されていたが、その卒論がある時紛失していた。筆者が院生（卒論の著者）に確認したところ、自分が持ち帰ったわけではないとのことだった。その専攻の共同研究室は、カードキーとして学生証を通さない限り入れないシステムであったことから、当該の卒論を持ち去った犯人は専攻の学生以外には考えられない。他大学ではあるが、このような事例があることからして、本専攻の卒論も一定数が後輩学生によって持ち去らされていると考えざるをえない。

③に関しては、少なくとも現状の本専攻では現実問題として卒論に電子タグを埋め込み、持ち出しを管理することや、スタッフが共同研究室に常駐して監視することが不可能であることから、どのように努力しても限界は明らかである。しかしながら、現実には所在不明になっている卒論が無視できない数あることから、専攻の管理体制に問題と責任があることは否めない。現状では、共同研究室の扉をパスワード制にし、専攻の学生とスタッフ以外が卒論に近づくことが不可能な状態の管理体制が構築されているものの、卒論を持ち去る当事者が当の学生だと考えられることから、根本的な解決策が見いだしにくい。結局はモラルの向上を求めることに対応策が帰結する。

さて、ここまで、一定数の卒論が所在不明になっていること、卒論を持ち去る事例としては提出した学生本人

によるものと、後輩によると考えられるものがあることが確認された。仮に、学生本人が持ち帰るとすれば、それは「後輩の目に触れられたくない恥ずかしい卒論」、言いかえれば評価の低い卒論がより多く持ち帰られる傾向があるだろう。また、後輩が卒論を持ち去る場合は、自身の卒論の参考になりそうな「見本となる卒論」、すなわち評価の高い卒論が選別されて持ち去られる傾向があるだろう。

そこで、所在不明になっている卒論35本の成績評価の内訳を示したのが第2表である。これを見ると、A評価の卒論が9本、B評価の卒論が20本、C評価の卒論が6本所在不明になっている。これから、特に「恥ずかしい卒論」「見本となる卒論」等の偏りは見られない。特に、「見られて恥ずかしくないが見本にもならない卒論」、すなわちB評価の卒論が多く所在不明になっていることから考えると、結局のところ、多くの場合、なぜその卒論が持ち去られたかは不明と言わざるをえないことが多い。卒論を本人が持ち帰るにせよ後輩が持ち出すにせよ、その動機には個人的な要因が大きく関わりと解釈するべきなのだろうか。ただ、これ以上卒業生や学生を疑うことは避けたく、検討はひとまずここまでにした。

第2表 所在不明状態の卒論の成績評価別本数

評価Aの卒論	9本	評価Bの卒論	20本	評価Cの卒論	6本
--------	----	--------	-----	--------	----

・愛知大学豊橋教務課資料と筆者の調査より作成。

## 第四章 まとめと展望

### (一) 知見のまとめ

本稿では、卒論の管理・保管体制の現状と課題について、主に愛知大学文学部地理学専攻の状況を事例に検討してきた。卒論は、当該大学、学部、専攻の教学の質を証明するものであると同時に、学生にとっても一生の思い出といえるもので、その蓄積は大学や専攻の大きな財産である。しかしながら、その管理体制は大学や専攻間、極端な場合は教員によって様々であり、活用形態も一様でない。

愛知大学文学部地理学専攻においては、原則として専攻発足からの卒論がすべて共同研究室に収蔵されており、現在、その蓄積は600本に及んでいる。この蓄積を生かし、先輩の卒論を後輩が跡付ける科目や卒業論文の指導において、卒論を活用し、先輩の到達点と教学の伝統を継承させつつも、最終的には自身の卒論をもって、先輩の到達点を乗り越えることを目指すカリキュラムが構築されている。

しかしながら、二十一世紀に限っても、収蔵されているべき卒論の16%が所在不明の状態になっており、これは教室の財産の紛失ならびに教学の質を担保する証拠の紛失、そして卒業生に対しての責任を果たせていないものとして、極めて大きな問題だといえる。また、これ以前の卒論においても、相当数が所在不明の状態になっていると考えられ、その把握が急務となっている。2001年度から現在までに限定しても35本の卒論が所在不明になっていることから推測すると、専攻の開設以来、すでに100本かそれ以上の卒論が専攻から失われた

恐れがあることを指摘せざるをえない。

卒論の紛失への根本的な解決策としては、図書館の書庫等に嚴重に収蔵して管理することが挙げられるが、これは卒論の死蔵につながる。これは、折角の学術成果としての卒論の役割が果たせなくなることになり、本末転倒ともいえる。また、物理的に図書館の収蔵スペースの余裕もなく、この方法を取るのは困難である。現実には、卒論の大切さを学生一人一人に伝え、理解し、尊重させていく地道な努力を続けていくしかないのだろう。

## (二) 卒業論文をいかに活用すべきか

本学に限らず、現在、卒論の管理や活用に関しては、大学間で共有できる統一的なガイドラインが構築されているわけではない。それにとどまらず、同一大学内においても、学部や専攻、時には教員に応じて卒論の管理や活用形態がバラバラであることも少なくない。「学士力」の養成が大学に求められている今日において、大学時代の学習と研究の最大の成果であり、その集大成といえる卒論は、当該学生が学士力を身に着けたのか、あるいはその専攻・学部・大学が学士力を十分に養成させるに足りる教育を行っているかを就職率や資格取得率などよりもはるかに雄弁に証拠立てる資産である。その卒論の管理がおざなりであっては大学の社会的役割を果たせないと見えるし、また卒論の活用もしない（できない）のであれば、自らの教学に自信がないのかと訝しがられることにつながりかねない。

もちろん、ここで取り上げた愛知大学文学部地理学専攻の管理体制が他の見本になるようなものだとはい底考えていない。ただ、卒論を死蔵すれば研究成果ならびに財産として活用する道が阻まれ、かといって積極的に人

の目に触れる状態に置けば紛失のリスクがある現状を赤裸々に記すことで、大学、特に私立大学の教学現場において卒論管理が抱える課題を示したかっただけである。今日では文書のデジタルアーカイブ化も進んでおり、いずれは卒論もその対象になるだろう。拙い事例ではあるが、学士力の証拠書類として、そして大学ならびに社会の財産として、卒論をいかに管理・保管し、活用していくのか、すべての大学が意識を共有し、議論を盛り上げていくための一助になれば幸いである。

### 謝辞

本稿をまとめるにあたり、愛知大学豊橋教務課の皆さまに、過去の卒論提出状況等の照会において終始ご高配いただきました。末筆ながら、記して感謝申し上げます。

### 注

- (1) 桑原武夫「研究者と実践者」(桑原武夫)『研究者と実践者』中央公論社、1960) 42～53頁。
- (2) 平井孝典「国立大学法人における卒業論文の扱い」『アーカイブズ学研究』3、2005、13～30頁。
- (3) 国立大学協会『平成12年10月11日国立大学協会第7常置委員会 国立大学における情報公開についての検討結果報告』2000。
- (4) 前掲(2)。
- (5) 坂本健治ほか「XIN」を利用した卒業論文管理システムの考察」成蹊大学工学研究報告40・2、2003、43～49頁。
- (6) 実際には卒論を必修としない学部もある。



- (7) 前掲(2)。
- (8) 東京大学人文地理学教室ホームページ「学位論文の取扱いに関するお知らせとお願ひ」(<http://www.humgeo.c.u-tokyo.ac.jp/paper/alum.html>: 2014年5月1日閲覧)。
- (9) お茶の水大学地理学教室「広告・卒業論文の返却について」お茶の水地理42、20001、107頁。
- (10) 京都大学地理学教室の卒論は、一部図書館等に収蔵されているものもある。
- (11) 京都大学文学部地理学教室編『地理学 京都の百年』補遺』ナカニシヤ出版、2008、155～37頁。
- (12) 京都大学文学部地理学教室編『地理学 京都の百年』ナカニシヤ出版、2008、14～20頁。
- (13) 海野一隆(1921～2006)は大阪大学名誉教授。歴史地図の研究で著名。1945年度卒。岩田慶治(1922～2013)は国立民族学博物館名誉教授。文化人類学に転じて膨大な業績を残す。1946年度卒。水津一郎(1923～1996)は京都大学名誉教授、奈良大学学長。1948年度卒。井関弘太郎(1925～2002)は名古屋大学名誉教授。名古屋大学地理学教室の創設者の一人。1948年度卒。ただし、これはあくまで出身教室で確認できないにすぎず、本人が収蔵していた、コピーを持っていた等の理由で、今後彼らの卒論が発見、確認される可能性はある。例えば、岩田と水津が卒論を書いていたことについては、織田が証言している(『歴史的風土で培われた地理学―小牧実繁・織田武雄先生に聞く―』(竹内啓一・正井泰夫編『地理学を学ぶ』古今書院、1986所収)42～74頁)。
- (14) 同じく大規模教室である国士舘大学地理学専攻などでも同様の体制が取られている。
- (15) このほか、文学会賞を受賞した卒論に関しては、文学部の他専攻と同様に文学会室に配架している。
- (16) 愛知大学文学部地理学専攻ホームページ「卒業論文」(<http://taweb.archi-u.ac.jp/geogr/sotsuron.html>: 2014年5月6日閲覧)。
- (17) 『愛知大学 大学案内2014』愛知大学、2013、126頁。
- (18) 前掲(2)。
- (19) 前掲(2)。それゆえ、当然のことながら、学生が提出した卒論を、指導教員が「自分が指導したから」という理由で学生に無断で発表することは許されないのである。